－役員エッセイ－

大通公園を望む窓辺から

日本の物づくりの原点

常任理事　北野　明宣

先日、わたしの病院で、法で定められている外部連結送水管（消防車からの給水管）の定期加圧検査を受けた。検査時、予定の半分にも満たない加圧時点で注入口ねじ切り部分の破損・破裂により勢いよく飛んで外れてしまった。検査技術者がそばにいてあやうく人身大事故になりかねないところ間一髪無事に済んだ。破裂事故の原因はねじ切り差し込み長さが必要な長さの３分の１から５分の１の３～５mmしか入っていなかったためと判明した。後から考えてみると工事の際、「現場で切り間違いをして短く切ってしまった。」のか「事前の寸法誤りだったのか。」は分からないが安全な長さより短いまま収めてその場をしのいだ感じがしてならない。下請け業者は足りないことは知っていたはずなのに工期を考えたのか材料を調達しやり直しをすることをしなかった。その場で収めてしまえば外見からは分からないと施行されてしまったのか。このようなことが工事現場で日常的に行われていることなのか釈然としない。

昨今、神奈川県におけるマンション工事を行った旭化成建材の杭打ち工事偽装ニュースがマスコミを賑わしている。所定の必要な長さの杭を打たず他のデータを流用し申請書類を作成した工事である。建物が傾いて初めて調査し、その瑕疵が露呈した。唖然として言葉も出ない。業者がいくら釈明しようとも目に見えないところを隠ぺいされてしまうと一般人にとってはまず判別できない。「どうせ分からないのだから･･･」と言う気持ちが徐々に信頼性、信用性が失墜してしまう結果となってしまった。

今回の事件は一個人の問題だけなのだろうか。建築業界ではこれが常套手段として行われているものであろうか。一蓮托生、業界のモラルの低下が透けて見える。

日本の物づくりはその信頼度、確実性の中で世界に評価されてきた。日本人の勤勉さ誠実さを基本に信用される物づくりが継承されてきている。ゆとり教育等や社会の仕組みが日本国民の考え方を変化させてしまったのであろうか。命を預かる建築や医療等にこのようなことがあってはならないことと思う。

“レベルが違うけど”

理事　山下　裕久

40年も前の夜、医局で一人ビールを飲んでいたら、M教授が隣室から顔を出され「やあ、いましたか」と声をかけられた。教授は勉強に戻られていた。赤面した。

20年もたち、退官された教授を小旅行にお誘いした。「休日に官舎の庭で草とりをしていたら、家内に“あなた、そんなことなさらないで勉強なさったら”と言われた。なにか良いことをしているような、そんな気持ちでしていたのだけどね」との話をお聞きした。

家を持った。十坪ほどの庭に多少の樹とツツジが植わっている。当初は花を買い球根を植えたが、生来の不精で結局は雑草だらけになった。ある日、冬囲いの方に「庭の端にある苔を育てたら良いですよ」と助言された。日陰に猫の額ほどに生えている苔である。何をするかと言えば、苔以外の草をただ抜くだけである。

一年経ち、一坪ほどが苔になり、４～５年たって庭の８割が苔庭？となった。早起き高齢者の趣味？が早朝１時間の庭いじり草むしりである。当然、妻の邪魔にはならず“勉強しなさい”とも言われずお金もかからない。目線が低くなるとミミズの出入りが見える。庭に生え放題だったクローバーの根が地中深く真直に伸びていて、引き抜くのにコツがあることも学んだ。

今夏、腰痛でひと月ほど草とりを中断した。庭は雑草畑に！と思いきや意外にも保たれた。苔で覆われることで種が地面に到達しにくいらしい。けれども草の種は尽きることがない。来る年もその先も趣味！が続く。先の天皇によれは雑草という草はないと言い、名を知らないのは知識がないだけという。最近、植物は葉緑素を得て動物から進化した？と言う説を聞いた。知が少ないことは受け入れる余地が多いということかと受け止めている。